

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 46 回 第 11.1.1 節～第 11.1.5 節

2019 年 11 月 15 日

小 田 勝

今回から、「第 11 章 名詞句」に入る。名詞の文法的なふるまいは、なかなか“奥が深い”と思うのだが、ほかの古典文法書では何故かあまり取り上げられていない項目であるので、本書でのこの章の記述密度はいささか自負するところであるし、一層の拡充を図りたいところである。

311 頁「11.1.1 事物表示と属性表示」の用例(1)～(5)と◆は、「補遺稿」第 7 回で新設した「3.2.2' XはXなり」で扱った。次例は「夕暮れらしきが見えぬ」の意である。

- ・ 降り積もる色より月の影 (=月光) になりて夕暮れ見えぬ庭の白雪 (風雅 854)

312 頁「11.1.2 モノ名詞とデキゴト名詞」の 6 行目 (頁の天からは 11 行目)、初刷・第 2 刷で「炭で焼く」意」とあったのを、第 3 刷で「炭焼きをする」意」に改めた。用例(3)の類例をあげる。

- ・ a 内へ参らせ給はんとて御装束のほどなれば (大鏡) <デキゴト名詞>
- ・ b 狩の御装束着換へなどして出で給ふ。(源・夕顔) <モノ名詞>

一般に「___は、…事なり。」の下線部に位置する名詞はデキゴト名詞といえる。次例の下線部は、「北枕をすること」の意である。

- ・ 北は、忌むことなり。(徒然 133)

同頁「11.1.3 名詞の換喩的使用」の類例をあげる。

- ・ 浦づたふ棹 (=棹ヲ操ル海人) の歌のみ聞こゆなり海人の友船霧がくれつつ (守覚法親王集)
 - ・ 西 (=極楽浄土) へ行く心は我もあるものをひとりな入りそ秋の夜の月 (金葉 580)
 - ・ 勝ち (=勝ッタ方ノ人々)、座に着き終はりて、負け (=負ケタ方ノ人々)、舟を作りて、御引き出物以下を積む。(春の深山路)
 - ・ 犬の足 (=犬ノ足ヲ切ッタトイウ話) はあとなき (=根モ葉モナイ) ことなり。(徒然 128)
- 次例の「朝敵の船」は、「朝敵 [を討討する朝廷側] の船」の意であろう。
- ・ 八郎 (=為朝) 調伏せられて十三日病やまひに臥したりけるが、少し良くなりて三日といふに、朝敵の船は寄せたりけり。(保元)

「^{おとどばら}大臣腹」というのも妙な表現だが、「大臣の娘が産んだ子」の意である。

・大殿腹の若君 (=葵上ガ産ンダ子、夕霧)、人よりはことにうつくしうて (源・澤標)
「[親王たち、大臣]の御腹といへど」(源・薄雲)のような言いかたもある。

313 頁 2 つ目の◆であるが、「鶴が音」も同様に「鶴」の意で用いられることがある (万 2138)。この次に、節を新設する (例は色々ありそうなのだが、今多くをあげ得ない)。

11. 1. 3' 優等の含意(新設)

名詞だけで「優れた+名詞」の意を含意することがある。

(1) おぼえことに (=人望ガ厚ク)、容貌 (=優レタ容貌) あるかぎり (源・葵)

同頁「11.1.4 選択制限」。用例(3)～(6)のように、「涙」と言わずに「涙」を表す例はたいへん多い (全表現形式を集めてみたい気もする)。

・かきくらし思ひ乱れて、枕も浮きぬばかり人やりならず流し添へつつ (源・柏木)
次例は「盛りに」によって、「おもしろいのは、片岸の崩れに咲いている花とわかる。

・^{かたぎし}片岸の崩れなど、いと盛りにおもしろし。(栄花 27)
次例は、通常「髪を払いのける」意の「かきやる」を「涙をかき払う」の意に用いて秀逸というべきである。

・見し人の寝くたれ^{がみ}髪^の面影に涙かきやる小夜の手枕 (新勅撰 827)

314 頁「11.1.5 場所名詞・方向名詞」。用例(2)は、「女に、『行きてもの言はん』と言ひければ」とも読めるので、確かな例とはいえなかった。通い婚の対象は場所名詞とはいえないだろうが、あげておく。「に」格も「を」格もある。

・昔、陸奥の国にて、なでふことなき人の妻に通ひけるに (伊勢 15)

・汝が若妻をば博業ひそかに通ふなる、汝知りたるか。(文机談)

なお、上例第 2 例中の「若妻」という語、『日本国語大辞典 [第 2 版]』の挙例の『連環記』(1940 年)を 650 年ほど遡る (所在は『文机談全注釈』の 87 頁。ついでに書くと、私が見つけた最高記録は、「ふかむ (深)」(自マ五 (四)) の同辞書の挙例、『うけとり』(1933 年) → 『歌合 3 是貞合』(892 年頃) の約 1040 年の遡行あたりだろうか)。

※前回 (第 45 回) の補遺稿の最初 (106 頁) の 5 行目にある用例、「宮立ち」は「宮たち」の誤記であった。お詫びして訂正する。